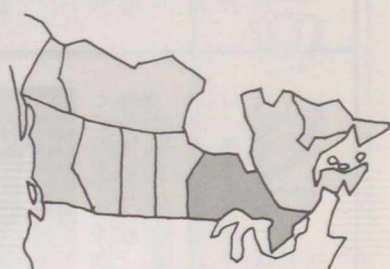




産業と文化の中心 オンタリオ州

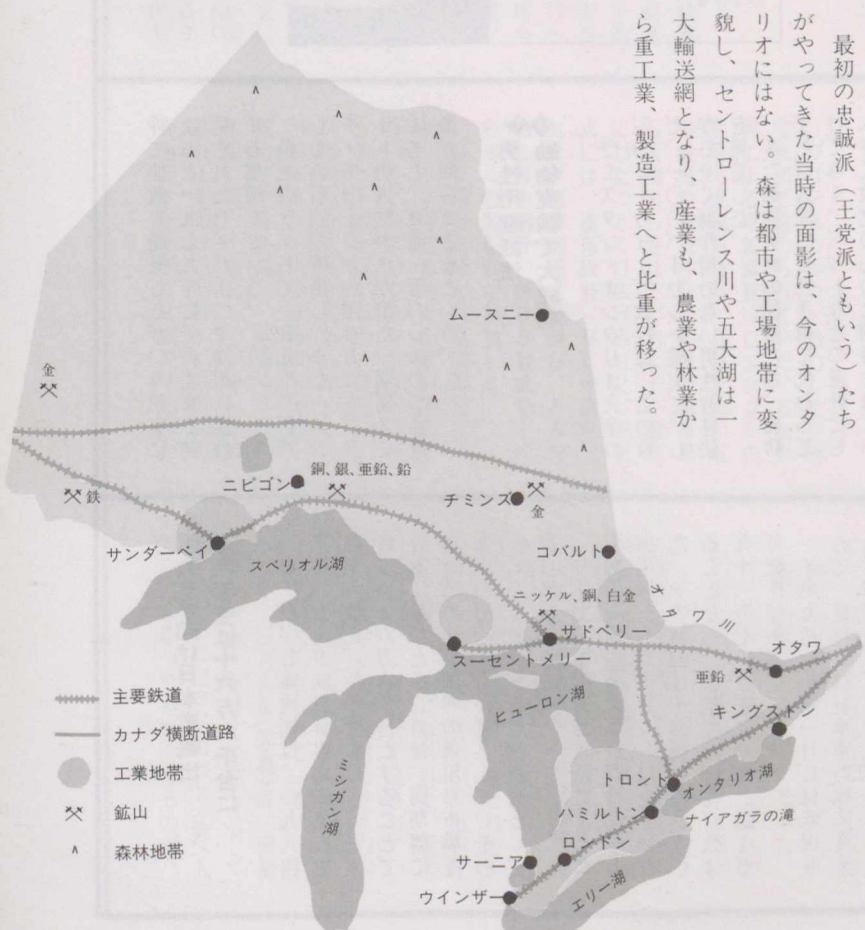


日本の約三倍の面積（百六万九千平方キロ）。東西をケベック、マニトバ両州にはさまれ、北はハドソン湾から北極海に抜け、南は五大湖とその五大湖をへだてて米国の工業地帯に面する。沿岸にはトロント、ハミルトン、ウインザー、といったカナダ有数の商・工業都市が並び、ケベックとの州境にはカナダ連邦の首都オタワ、そして米加国境には世界一の観光地ナイアガラの滝。カナダの総人口の三五・四パーセント、工業生産額の五三パーセントを占めるオンタリオ州は、カナダの産業と政治、そして文化の中心である。

歴史

ちょうどいまから二百年前の六月、一団のボートがモントリオールを発ってセントローレンス川をのぼっていった。乗っていたのは、米国の独立戦争で英国側につき、今や難民と化して北上してきた忠誠派といわれる人たち——農民や商人、兵士、工芸家、狩人——であった。多くは米国生まれの英国系市民であったが、ドイツ系、オランダ系、あるいはイロクワ族インディアンなども混じっていた。目ざすはセントローレンス川の上流からオンタリオ湖の北岸にかけての一角である。英国は米国の独立戦争で十三州を失ったが、現在のラブラドルからケベック、オンタリオ両州の南部にまたがる一帯は、いまだその手中にあった。秋までに、およそ四千人の忠誠派やその家族、あるいは敗残兵が、モントリオールとオンタリオ湖の間のセントローレンス川沿岸、オンタリオ湖の北東岸、オンタリオ湖とエリー湖の間にあるナイアガラ川の西岸に落ち着いた。土地が比較的安いこともあって、米国からの移住者はその後も相次ぎ、カナダ植民地（現在のケベック、オンタリオ一帯）の人口は一七九一年までには約三万人に達する。そしてその年、カナダ植民地は、フランス系住民を中心とするローワー・カナダ（今は今日のケベック州に相当）とオンタリオ湖北岸からエリー湖北岸にかけてのアッパー・カナダに二分される。このアッパー・カナダこそ、現在のオンタリオ州の前身である。

最初の忠誠派（王党派ともいう）たちがやってきた当時の面影は、今のオンタリオにはない。森は都市や工場地帯に変貌し、セントローレンス川や五大湖は大輸送網となり、産業も、農業や林業から重工業、製造工業へと比重が移った。



産業

オンタリオ州の発展の基礎は、その恵まれた資源と地理的位置にある。州の大半をおおう森林は、世界でも指折りのバルブ・製紙産業を生み、地下から掘り出される銅、ニッケル、プラチナ、ウラン、亜鉛、金、銀、石こう、鉄鉱石といった多種多様な鉱物資源は、州の産業の基盤となった。特にサドベリー周辺は、ニッケル、銅、プラチナなどの世界的な産地である。比較的温暖で肥沃な南部は、国内で

も有数の農業地帯。ナイアガラ半島ではぶどう、なし、りんごの栽培が盛んで、ワインも産し、西部はタバコ、スイートコーン、穀物、野菜の生産および酪農で知られる。

その豊かさと形から、黄金の馬蹄といわれるトロントからナイアガラに至る地域は、オンタリオだけでなくカナダでも随一の工業地帯。カナダの鉄鋼の約八割は、ハミルトンを中心とするこの一帯の工業都市で生産される。

オンタリオ州の発展は、もちろん米国と隣接していることによるところが大きい。ウインザーを中心とする自動車工業はその最たるものである。米加間の自動車貿易は、一九六五年の協定により完全に自由化され、自動車工業も両国の間で一貫した協同生産体制をとっている。（そのために、米国の自動車産業の浮沈が直接カナダに影響してくる。）

オンタリオ州はまた、コンピュータなど時代の最先端をいく高度技術の研究および産業でも知られる。特に連邦政府の研究所の多い首都オタワの近くにあるいわゆるオタワ・バレーには、大小のハイテク企業が立ち並び、さまざまな技術を生み出している。州ではハイテク技術を大きく重視し、昨年、マイクロエレクトロニクス、コンピュータ支援設計（CAD）および製造（CAM）、ロボット、自動車部品、食品加工、および資源開発機器に取り組み技術センターを設立した。こうしたさまざまな経済活動の中心は、州都のトロント。かつて活気のない町の

州都	トロント
州首相	ウィリアム・デビス（進歩保守党）
面積	一、〇六八、五八二平方キロ
人口	八、八八七、〇〇〇人（八三年十一月推定）
主要産業	製造（自動車、鉄鋼、石油精製、食品、その他）、建設、農業、鉱業、電力、観光

代名詞のようにいわれていたトロントは、カナダ最大の都市に発展した（人口約三百万）。今では北米第二の証券取引所であるトロント・ストック・エクスチェンジをはじめ、カナダの主要企業、銀行などが集中するカナダ第一の商業・金融都市である。

資源、電力供給、労働力、消費市場、輸送、資本——オンタリオ州はすべての条件に恵まれており、今後ともカナダ経済の牽引車となることは間違いない。それだけに、日本からの企業進出も約百十社と、カナダ十州の中では最も多い。大手商社や銀行、自動車等の販売会社などのほか、最近では三菱電機や本田技研が工場進出した。

文化

オンタリオ州はしかし、ただ産業だけの州ではない。ここはヨーロッパ、アジア



ウィリアム・デビス州首相

ア、中南米、アフリカと世界のあらゆるところからきたさまざまな民族が隣り合わせに住みついて独特のコスモポリタンの雰囲気醸成しだし（日系人もおよそ二万を数える）、伝統ある大学が軒を並べ、文学や音楽、美術、映画などの創作活動の本拠地でもある。カナダを代表する画家集団グループ・オブ・セブンが活動したのは、オタワからおおよそ二百キロ西にあるアルゴンキン自然公園だし、マーガレット・アトウッド、マーガレット・ローレンス、ロバートソン・デイヴィズ、モーリー・キャラハンといった著名な作家もオンタリオに在任して作品を書き続けている。オンタリオは、テレビ、新聞、雑誌、ラジオなどのメディアあるいは出版活動の中心でもある。

さらに、ナイアガラ・オン・ザ・レイクで毎年行なわれるショー・フェスティバル、毎年六月から十月まで開演されるストラトフォードでのシエータスピア演劇祭、トロント交響楽団をはじめとする音楽活動、カナダ・オペラやナショナル・バレエ団による地元公演と、一年を通じて質の高い舞台芸術が楽しめる。施設も、オキーフ・センター、ロイ・トムソン・ホール、マッセイ・ホール、ナショナル・アーツ・センター、国立美術館、ロイヤル・オンタリオ博物館……と、あらゆるものが揃っている。